
世界で一番スキなヒト

憂月千夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番スキなヒト

【Nコード】

N0410A

【作者名】

憂月千夏

【あらすじ】

ジツワラモトニシタセツナイラブストーリー

第一話

涙は出なかった。

もう枯れ果てていた。

今でこそ流すべきものだと思っけど

今まで無駄に流しすぎてもう給水信号が出ている。

マナはこちらを向いていない涼平の写真を静かに伏せた。

2001年4月25日

この日はマナの人生の中間路を大きく変える日となる。

涼平と出会った日

運命というものだろうか。

中学初めての部活。

マナは絶対テニス部と決めていて、四日あった仮入部期間を全てテニス部にあてた。

しかし本入部手続きの日、マナが向かったのはテニスコートではなく体育館だった。

母からも友人からも驚かれた。

「絶対テニスに入るって、小学校の卒業式にさんざん言ってたじゃない」

「バスケ部なんて仮入どころが見学すらしてないのに。どうして？」

不思議がられた。

しかしマナ自身もわからない。

球技は嫌いではなかったし、根っからの運動音痴というわけでもなかった。

テニスが不満になったというわけではないし、バスケが大好きというわけではないけれど

この気まぐれな決断がマナの人生をやや傾けたのである。

こうしてマナはバスケ部新入部員の十一人の中の一人として中学校生活をスタートさせた。

第二話

バスケ部は男子7人女

子11人と部員が少数なので、『男バス』『女バス』ではなく同じ『バスケットボール部』として活動していた。

メニューは違うものの、練習は一緒にやるのである。

運動部につきものなのが

「上下関係」。

小学校から出たばかりの一年生には難関の壁ともいえる。

特にバスケ部は学校内で野球部の次に厳しいといわれていた。

挨拶は基本中の基本、敬語や気遣いなど一つ一つが厳しい。

まず先輩の名前と顔を覚えるのが大変だった。

マナは目が悪い。眼鏡を持っではいるがかけるのが嫌で授業中しかかけない。

だから中々顔を覚えることができなかった。

二年生が三年生のユニフォーム番号と名前を覚えてくれたのが幸이었다。

ユニフォーム番号なら大きくハッキリ書いてあるので見やすい。

縦書きに並んだ一番上の『4 リョーヘイsp』という文字はきつと忘れない。

とにかく顔を覚える前に名前を覚えようと必死だった。

部活の連絡網のてっぺんも、住所録のてっぺんも、バスケ部案内のてっぺんも『田中涼平』の名が載っていた。

やっかいだったのが三年生に『涼平』という名前が二人いたこと。

『田中涼平』と『北本涼平』

ユニフォーム4番5番を持つスターティングメンバーだ。

今思い出してみると全く似てないけれど、当時は身長も髪形も似ていたのでマナは大苦戦した。

第三話

タメの子達は仲良し同士で入部したらしく、はじめの頃マナは一人ぼっちだったが、すぐに友達ができた。

角倉亜希。クラスは同じだが、亜希は外見が派手でいつもギャル系の子達と一緒にだったので話しかけづらかった。

帰り道一人で歩いているときに亜希から声をかけてくれた。

「根本愛海ちゃん！同じクラスだよねー？あたし角倉亜希だよ！亜希でいーよ！マナって呼んでいい？」

明るい子だった。

亜希と同じ小学校の人からあまりいい噂を聞かなかったが、話してみると面白くていい子だった。

学校でも一緒にいるようになった。

亜希だけが信用できる友達だった。

二人だけの交換日記も話がはずんだ。

6月9日 晴れ

マナのページに書かれた文字
『気になるヒトができました』

第四話

涙は出なかった。

もう枯れ果ていた。

今でこそ流すべきものだと思っけど

今まで無駄に流しすぎてもう給水信号が出ている。

マナはこちらを向いていない涼平の写真を静かに伏せた。

2001年4月25日

この日はマナの人生の中間路を大きく変える日となる。

涼平と出会った日

運命というものだろうか。

中学初めての部活。

マナは絶対テニス部と決めていて、四日あった仮入部期間を全てテニス部にあてた。

しかし本入部手続きの日、マナが向かったのはテニスコートではなく体育館だった。

母からも友人からも驚かれた。

「絶対テニスに入るって、小学校の卒業式にさんざん言ってたじゃない」

「バスケ部なんて仮入どころか見学すらしてないのに。どうして？」

不思議がられた。

しかしマナ自身もわからない。

球技は嫌いではなかったし、根っからの運動音痴というわけでもなかった。

テニスが不満になったというわけではないし、バスケが大好きというわけではないけれど

この気まぐれな決断がマナの人生をやや傾けたのである。

こうしてマナはバスケ部新入部員の十一人の中の一人として中学校生活をスタートさせた。

第四話く修正verく(前書き)

第四話を完全修正したものです

第四話〈修正ver〉

バスケ部はとにかく本当に上下関係が厳しかった。

マナ達一年生から見たら、三年生なんて王のような存在。そこまで厳しかったのだ。

練習の準備も後片付けも全て一年生の仕事。

しかし言われてすぐそうスムーズに上手くこなせない。

しょっちゅう失敗しては怒られていた。

怒るのはいつも二年生

だから、二年生が頭を下げる三年生はもつと凄いなと思った。

中でも特に尊敬、慕っていたのはキャプテンの田中涼平。

マナは涼平の笑ったところを見たことがない。
それぐらい自分にも部活にも厳しい。

顔もイイからきつとバスケ部以外の女子もチェックを入れてると思う。

何よりもバスケをしている姿が一番カッコイイ。

6月9日の練習試合

マナにとって初めての練習試合

そのときの涼平を今でも忘れることはできない、恋の始まった瞬間
…。

第五話

マナにとって初めての練習試合。

横浜の学校が会場だったので、朝早くに集合し、通勤ラッシュにもまれながら電車で2時間半かけて向かった。

一年生は試合ど使う荷物を分担して持っていたので、手がちぎれると思うぐらい痛くなった。

シーサイドラインへの乗り換えのとき。

大人数で乗るわけにはいけないので、分かれて乗った。

マナは亜希と同じ車両に乗った。

その車両には涼平が乗っていた。

他の男子部員に混ざって喋っている。

マナのところからでは顔が見えなくて残念だった。

つい最近亜希と三年生な中で誰がタイプだとかそういう話をした。

亜希はセンターの鈴木啓先輩に目をつけているらしい。

「好きとかそういうんじゃないけど、田中涼平先輩に憧れてる」

マナが言つとストレートな亜希の非難をあびまくつた。

涼平はポジションはガードで身長は165とバス界の中では低いほう。

何より笑わないしキツそうところが亜希としては除外らしい。

だがこの日見たのだ。降りる直前に仲間に冗談を言われて笑う涼平の顔を。

それはマナに向けられた笑顔ではないけれど初めて見たその笑顔にドキツとした。

第六話

今まで笑わなかった人が笑っている。

マナはなんと新鮮な気持ちになった。

いつもの真剣で険しい顔と違ってとても優しい、こちらも思わずつられて笑ってしまうような笑顔。

その顔が忘れられなくなった。

しかし恋というにはまだ実感のわからない程度だった。

マナは試合中ずっと涼平を目で追っていた。

普段もう一人の涼平、北本涼平と中々見分けがつかないのだが、ユニフォームが目印となりしつかり

「田中涼平」

を見ることができた。

真剣な顔にもマナはドキドキしてしまった。

改めてカッコイイなと思った。

その帰り道。

ハプニングが起こった。

シーサイドラインに乗り継ぐときのこと。

切符は三年生、二年生、一年生の順で買う。

一年生がもたもた買っていたせいで一本乗り遅れてしまったのだ。

試合後で疲れてイライラしていた三年生達は不満を口にし、バスケット部以外に無人となったホームに気まずい空気が漂った。

「いーよいーよ。しょうがないよ。次の待とう」

静寂を破ったのは涼平だった。

「でも…」

「いつまでもグチグチ言うなって」

あっさりと三年生達をまとめた。

ああこれがキャプテンなのだと思った。

あのときの涼平はプレー中のカッコ良さとはまた違った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0410a/>

世界で一番スキなヒト

2010年10月11日15時11分発行